

3 「2020 年国際学部の SDGs の取り組み」

SDGs の達成に向けた国際機関の活動とキャリア形成の視点

—国際機関の職員（境悠一郎氏、田邊宙大氏）と宇大生による座談会—

藤井 広重

座談会参加者：宇都宮大学国際学部国際学科 3 年

アティラ・ナシル、榊原彩加

2020年初旬より拡大した新型コロナウイルスの影響により国内外での移動が制限される中、オンラインでの公開セミナーを開催した。1 日目に登壇いただいた日野氏も、拡大前まではウガンダに駐在されていたが新型コロナウイルスの影響により緊急帰国を余儀なくされていた。大学も様々な影響を被ることになったが、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターの支援を受けて本ウェブナーの開催が実現したことで、人と人とのつながり方を模索する現況において、新たな可能性にも触れることができた。詳細な報告については、本号に収録されている「宇都宮大学SDGsウェブナー：SDG16（平和と公正をすべての人に）の達成に向けた国際機関の役割と現場から見える今後の課題」実施報告書も合わせてご覧いただきたい。2 日目に登壇の境氏は、勤務地のドイツから参加頂き、まさに国際学部にあふさわしい国際的な視点から議論が展開されたウェブナーとなった。日本全国、中学生から一般の方まで約100名の方々が今回の連続ウェブナーに参加され、今後につながる非常に示唆に富む試みであった。

概要

2015年9月25日にSDGs（持続可能な開発目標）が採択されたことを記念し、毎年9月に世界中の政府や地方自治体、市民社会組織、メディア、民間企業などがSDGsのために行動するキャンペーンが展開されている。SDGsについての体系的な理解については、数々の著書や

拙稿（藤井 2020a）などを是非ご覧頂くこととして、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターと藤井広重研究室が共催したウェブナーにて登壇頂いた国際経験豊かな専門家の方々に、SDGsに関する展望と国際協力分野での勤務を志す学生に対する助言など座談会形式でお話を伺った。

2020年は、9月18日～同26日の期間に「#Act 4 SDGs」と題したグローバルウィークが設定され、キャンペーンのウェブサイトには世界中のこうした活動を共有するために、「Global Map of Actions（<https://act4sdgs.org/map2020/>）」が作成されている。藤井広重研究室も、同ウェブサイトグローバルウィーク期間中の9月19日、23日、24日に実施した宇都宮大学SDGs ウェブナーについて登録している。本座談会は、このキャンペーンの一環として開催された9月24日のウェブナー終了後に、約1時間程度引き続き国連ボランティア計画の境悠一郎氏と国際機関日本アセアンセンターの田邊宙大氏をお招きし、宇都宮大学国際学部在籍する2名の学生とオンラインを通して開催された。両氏は、これまでのご経験から、丁寧に学生からの質問に回答して下さった。短い時間ではあったが、学生にとっては非常に有意義な時間となった。以下が、座談会の内容である。

藤井

先程のご講演、ありがとうございました。本座談会でも、かなりざっくりばらんにSDGsやお

二人のこれまでのキャリア等についてお話しいただければと思っております。特にお二人の専門分野に強い関心を持っている学生2人が来ておりますので、最初に自己紹介をしていただこうと思います。

アティラ

こんばんは。私から自己紹介をさせていただきます。宇都宮大学国際学部3年藤井ゼミのアティラ・ナシルと申します。先程の講演で、境様と田邊様にご質問させていただきましたが、本当に詳しい回答をありがとうございました。今日の座談会ですが、特にキャリアのことで詳しくお聞きできればうれしく思います。よろしくお願いします。

榊原

宇都宮大学国際学科3年の榊原彩加です。よろしく申し上げます。

藤井

今日はこの2人の質問を中心にSDGsをめぐる国際的な問題からキャリアの話まで、伺っていければと思います。最初にアティラさんからご質問ください。

アティラ

私からは、ご講演くださったお二方のキャリアについてお伺いしたいのですが、お二方が今の職場に行きつくまで、民間企業や他の国際機関を経験されたとお伺いしたんですけれども、そのような時の転換期、その時勤めていた職場から新しい職場に異動する時というのは、どのようなことを意識して新しい職場を決めていたのか、またその時の気持ち、心境をお伺いできればと思います。よろしくお願いします。

藤井

では、境さんからお願い致します。

境氏

はい。ありがとうございます。何度もいろいろなポストに就いてきました。先程、大学1年の時から国連で働きたいなと思ってたって話をしたのですが、やっぱり途上国に関する仕事をしたかった。そこで始めにどうするかと言ったとき、私はアメリカの大学に通っていたのですけれども、ウィスコンシンと言ってそんなに都会じゃなかったので、とりあえずワシントンD.C.に行って働けばいいなと思い、大学卒業後に引っ越しました。ワシントンD.C.での就職活動はうまくいかなかったので、まずは民間企業で働いて、それは環境にも恵まれて、いい経験になりました。そのあとに大学院に通って、勉強を進める中で、根本的な原因の解決や長期的な開発というのに興味をもって、UNDP（国際連合開発計画）で働けたらいいなと思っていました。アメリカの大学院は2年ですが、その時の夏休みにコロンビアのUNDPでインターシップをしたりして、そしてJPO（ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー）の試験を受けて、大学院の後にはUNDPで働き始めました。平和構築の分野で働きたかったので、シエラレオネやアフガニスタンで数年間働いて、その後、日本をずっと離れていたもので、日本がすごく恋しくなってしまうので、なので日本に帰国して、内閣府の研究員に着任しました。研究員として今まで取り組んできたことを体系的に考えてみるということは大事なことだと思って、そこでアフガニスタンに関する研究をしました。またILO（国際労働機関）の駐日事務所でも働いて、日本に3年間住んでみて、やっぱり海外がいいな、と（笑）。それは、海外で働いた方が働きやすいとか、国連のいろいろな国の人が集まっているので、そういった環境が自分には

やりやすいというのがあり、何より現場で働くというのが自分にとってやりがいが一番ある。ですので、やっぱりそうですね、これからは多分ほぼ現場で、特にマネジメントをする立場で平和構築に関わっていければと考えております。そこでは、積極的にイニシアティブをとって、自分が重要であると思っていることに取り組んでいて、それを周りにも分かってもらうことをやっていかなければならないと思っています、これから自分に取り組むことができる仕事を楽しみにしているところです。

田邊氏

私も今までいろいろな職場と関わってきて今思うのは、決してポジティブな理由だけで職場を変えてきたというか、現状に決して満足してはなく、もしくは不満があって、時には逃げ出したくて、環境を変えたという例も半分以上あるのではないかと考えています。たとえば、南スーダンで勤務していた時、南スーダンがすごく嫌だったのですね（笑）。すごく嫌で何か変えなければいけないと思って、外務省の平和構築人材育成事業にアプライしたので、なにかネガティブな理由でも決して悪くないのではないかということはあるですね。最近本で読んだ一節でそうだなと思ったのが、環境を選ぶのも自分の努力、環境を変えるのも才能なのかな、と。才能というより、環境を変えるというのは

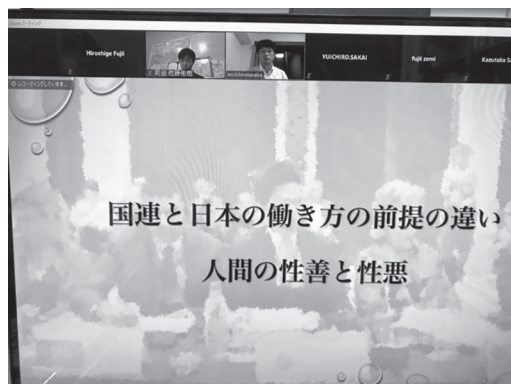
それを能動的に自分で行っていることが非常に大事だということ。例えばですが、魚釣りをしていて、魚が全然釣れないという時に、魚を釣ろうとする努力もすごく大事なのかもしれません、別の池を見つけたり、別の湖を見つけたりというのも意外に大事で、もしかしたら別の湖に行ったら、めちゃくちゃ魚が釣れるかもしれないので、職場とか働き方が違うなと思った、もしかしたらその環境じゃないのかもしれないという風に考えるのは、今の時世であるからというのものもあるかもしれませんが、ありじゃないのかなと思っています。

藤井

田邊さんは、イギリスの大学院に進学されましたが、どうしてイギリスの大学院にされたのですか。私は国際法を専攻していたので、当初からオランダの大学院への進学を希望していましたが、同じように進学を希望する学生からはよくアメリカとイギリスが候補に出てきて、それぞれのメリットやデメリットのようなものは、田邊さん、境さん、何かお感じになられますか。

田邊氏

そうですね。一番大きいのは、学位を取得するまでの期間が2年か1年かというのがあるのではないのでしょうか。当時の私も、やっぱりイギリスでは修士号が1年で取得できるというのは魅力的でしたし、金銭的にも、あとは自分の人生としても、2分の1の時間で取れるので、その他の2分の1を別に使えます、やはり時間は大きいです。当時、私が進学したブラッドフォード大学はかなり積極的に留学生を勧誘していて、セミナーとか、人事担当の人がブラッドフォードから日本に来て、日本の大阪で説明会とかしていたんですよ。その人について話を聞くと、やっぱり行きたいという実感



はどうしても湧いてしまいますので、その辺のイギリスの大学院のマーケティングもあったのではないかなと思います。

境氏

そうですね。考えてみたら、結構前の話なので、なぜ2年の修士課程のプログラムにしたかというのは覚えていないのですけれど、言われてみれば確かに1年で取れたらいいと思いますけどね。ただ、私の場合は、もともと開発の分野で働いていなかったの、専門性を高める修士課程一年目はすごく勉強になりましたし、結構勉強していましたし、それはよかったですね。あとインターンシップを国連機関でできたので、多分それをやっていなかったら、JPO試験にも受かっていなかったと思います。途上国で働いたこともなかったから、自分にとっては2年がいいのかなと当時は考えていたのかもしれない。

田邊氏

アメリカの大学院を修了した方は、知識をしっかりと身につけている感じはありますね。

アティラ

丁寧にご回答いただき、ありがとうございます。私も大学院への進学を希望しております。けれど、漠然と院に行きたいと思っているだけで、具体的にここに行きたいというのは、まだはっきりとは決まっていないのですけれども、藤井先生とお話する中で、アメリカ系とヨーロッパ系というのがあって、それぞれにはそれぞれの特徴・長所・短所というのがあって、それをしっかり分析したうえで決めなさいということであったので、お二方の今のお話はとても参考になりました。

藤井

では榊原さん、お願いします。

榊原

境様の先ほどのご講演の中で、元兵士の社会復帰の中に雇用の創出というお話をされていたのですが、具体的に雇用の創出というのは国連側としてはどのように取り組んでいるのかということが気になったので、お聞きしたいと思いました。また、ボランティアの話の中で、経験豊富なボランティアというお話をされていたのですが、「経験豊富なボランティア」って何だろうと思ひまして、どういう人たちが経験豊富な人たちと思われ、経験豊富な方たちはどのようなキャリアを歩まれてきたのかについて気になったので、ご回答いただければと思います。

境氏

アフガニスタンの時の雇用創出なのですが、やっぱり、反政府勢力で戦っていた人はそれまで戦うことによって、生計を立てていたもので、それがなくなってしまうと、働いて生計を立てて、暮らしを立てていけないといけない。そこで、こういった方々向けのプログラムを複数実施していました。例えば、元兵士の人とその人が社会復帰したコミュニティの両方を対象にしていたのですが、政府を通して支援をしていたので、4つの省庁と連携して、アフガニスタンでよく栽培されているピーナッツとかブドウを育てたりするプロジェクトとか、公共のインフラを担当している省庁で道の整備をしてもらったりですとか、職業訓練も大事なので、職につながる職業訓練のプロジェクト、あとは、コミュニティ開発において自分たちで話し合っ、その地域が必要とされているプロジェクトを実施していくというプロジェクトに取り組んでいました。

また職業訓練では、女性と男性と一緒に訓練することはできないということもあるので、女性だけを対象にしたプロジェクト、アフガニスタンではカーペットがすごく盛んで、とてもきれいなんですね。ですので、カーペットを買う人が結構いるので、これを作るプロジェクトを実施していましたが、課題だったのは、「サステナビリティ」です。プロジェクトはドナーの資金で行われていたので、アフガニスタンは先ほど田邊さんもお話されたように、国連としても優先度が高かったので、資金がいっぱい入ってきたんですけど、それを何とかプロジェクト以外の資金などで、継続的にできるようにとやろうとしていました。それは難しい試みであったと言えますが、こういうのが、雇用とか生計創出のために取り組んでいたことでした。

ボランティアについては、先ほども藤井さんがおっしゃっていたんですけど、国連ボランティアと言っても正規の職員とあんまり変わらない業務を求められます。約50の国連機関にボランティアを派遣していると言いましたが、そういう国連機関から“こういう仕事ができる人が必要なので、派遣してください”という要請を基に、派遣をしているんですけど、お医者さんであったり、看護師さんであったり、今は特にヘルスの分野で需要が高く、何らかの専門性を持っている人っていうのを基本的に国連ボランティアでは、派遣しています。数はそんなに

多くないんですけど、ユースのボランティアとかコミュニティのボランティアとか、いろんな形態があるので、仮に経験がそんなになくても国連で働きたいと思う人が応募できる時もあります。

榊原

ありがとうございます。国連は多くのステークホルダーと協働する必要があると思います。国連は大きな機関ではありますが、招集する力が働きやすい分野とか働きにくい分野とかあります。

境氏

国連は様々な分野で活動していますが、国連自体が国の集まり、特に安全保障理事会が重要な役割を果たしていると思うんですけど、そのほかにもSDGsもそうですね。SDGsがどうやって成立したのかというプロセスも、SDGsは国連のものではないですが、国連が中心となってこういうSDGsに向けた動きを作ったというのがあると思います。もともとMDGs（ミレニアム開発目標）というものがあってMDGsは8個の目標だったんですけど、SDGsは17個に増えて、そのゴールの設定にも色んな人が関わってきて、インターネットを利用して、こういうゴールが必要だっていうのを選べるようになっていました。それも結構もたっています。もちろんSDGs策定の過程には政府ですとかNGOですとか色んな団体が参加したいくつもの会議が行われていましたが、最近ですとインターネットなどの媒体を通じていろんな人に届くような工夫がされています。今も国連75周年で、75周年にあたって国連はどういう風に活動していったらいい風にしていかなきゃいけないかっていうのをウェブサイトでアンケートしています。それによって、75周年を祝うのに、おめでとうみたいなものじゃな



くて、じゃあ実際にどういうものが求められているのかっていうのを幅広く聞こうっていう取り組みも行われているわけです。ぜひ皆さんも国連のウェブサイトからそのアンケートやってみてください。

様々な分野でいろんな国のいろんな考え方があって、影響力の強い国とかもあるので、難しい部分もあると思いますが、私としては国連などの機関は絶対に必要だと思いますし、国家間の協力というものも必要だと思うので、これに逆行する流れも一部ありますが、できるだけ国際的な協力関係があることが、持続可能な平和とか開発とかにつながるのではないか、というふうに思います。

藤井

田邊さんはどう思いますか。

田邊氏

Convening power ですかね。UNDPに関して言うと答え方としてあっているかはわからないですけど、すごく広範な課題を取り扱っていて、よく開発の総合商社と言われるので、やはり分野ごとによって引き付けるステークホルダーとそうでないステークホルダーがあったりします。例えば、いつも11月～12月頃に、End Violence against Womanというキャンペーンがあるんですよね（ジェンダーに基づく暴力撤廃に向けたグローバルなキャンペーン）。それに関しては、やはり女性団体をぐっと引き付けます。

災害関係で言うと、横のネットワーク、例えばハザードマップをすでに作成しているNGOがいて、そこいかに提携するか。でも、ハザードマップは、うちの団体はうちで作っていて、うちのアセットだからそれは渡さないという人もいます。それは確かにそうなので、分野と普段の関係性にすごく関わってくるのではな

いかと思います。普段から各団体とコミュニケーションを取っておけば、ああそうなんだ、ちょっと見せてあげるよって言うかもしれないですが、ずっと連絡とってなくて、突然連絡とってハザードマップ見せてって言われたら、なんだそれ、ってなるわけです。国連はそういう人を日ごろからネットワークで重視することが結構大事なんじゃないかなと思いますね。常にいい関係を多方面で作っておくってことです。

藤井

次、アティラさんお願いします。

アティラ

私から2問目として、SDGsについてお伺いさせていただきたいなと思っていて、今私どもの宇都宮大学でもSDGsに便乗して、すべての授業においてこの授業はSDGsの何番と何番に関わっているというような感じで、SDGsに結び付けているんですね。改めてSDGsが浸透しているなということを最近感じています。そんなSDGsについてお二方にお伺いしたいんですけども、SDGsが掲げられる前までも、色々な国際機関があると思うんですけど、その国際機関は自分の理念に基づいて行動していると思うんですね。SDGsが掲げられた後ってというのは、自分の団体が行動していることはSDGsの何番と何番に当てはまるものなんだっていう意識すると思うんですね。それを意識したことによって、役割が変化したりとか、実際に働く人の意識が変わったりすることってあったのでしょうか。お二方の経験とご意見をお伺いしたいです。よろしくお願いします。

田邊氏

ありがとうございます。SDGsに便乗するという表現は本当にまさにその通りで、いい表

現をするなと思いました（笑）。2019年に日本に戻ってきてから、日本の企業の人めっちゃSDGsのバッジをつけているんですね。あれってやっぱり便乗ですよね、どう考えても（笑）。なので、ちょっと答えとあっているかはわかりませんが、国連をはじめ最近SDGsに代わって新たな言葉とかも生まれていて、Social Impact Investmentみたいな。あとSociety5.0。新しい言葉がどんどんどんどん生み出されて、それを使って新しいビジネスをしようとする人もいれば、それにちょっと遅れて便乗しようとする人もいるわけで、どういう風にSDGsとかの言葉が生み出されてきたのかってというのは、すごい大事なんじゃないかと思っています。それで言うと、私が聞いた話だと、SDGsの担当としてUNIDO（国際連合工業開発機関）で働いていた人で、「SDGsは、やはり妥協の産物的なところもあって、いろんな国のいろんな主張を妥協できずに全部詰め込んだのがSDGsだ」と話す人もいますので、一方でSDGsは魅力的ではあるものの、他方で国際社会における妥協の面もあって生まれたってというのは知っておいてもいいのかなと思います。

SDGsで何が変わったかについては、日本の企業はSDGsのあてはめ、マーケティングで終わっていると思います。セミナーでのボランティアに関する議論でも指摘されていたようにボランティアは自分のためにする、というところと似ていて、SDGsも自分が何を達成したいかで、それに合わせてその延長線上にSDGsの何かがあればそれを自分の中の軸として、SDGsを主体的に使っていくっていうのは、あってもいいんじゃないかと思っています。そこで、便乗するか使いこなすという視点はあってもいいのではないのでしょうか。

藤井

ありがとうございます。境さんお願いします。

境氏

はい、ありがとうございます。どんどん便乗してほしいですね（笑）。さっきもちょっと言いましたが、SDGsが達成されるにはみんなが関わらないといけないので、まずはみんなに知ってもらうということはすごい大事なことになるので、どんどんどんどん色んなところで使って、どんどん広めて、実際にそれを知って取り組んでいってほしいですね。SDGsが前のMDGsと違うのは、MDGsというのは途上国だけの問題のことだったんですけど、SDGsっていうのは先進国も含まれていて、先進国と途上国の間も含めて、様々な関係から成立しているという側面もあります。先進国から途上国への支援など、そういう国際協力系の分野に関して市民レベルから協力的っていうのはすごい大事なことになるので、どんどん広めていって、どんどん国際協力に皆で参加、支援していってほしいですね。そうしないと達成できないので、便乗でも何でも、まずは参加してもらうことが素晴らしいことだと思います。どんどん広まるということです。

仕事が変わったっていうのは、田邊さんとか私みたいにUNDPで働いていると、もともと途上国の問題解決を仕事にしているので、そんなに変わった部分はないですが、SDGsがもともとsustainableなので、climate changeですとか環境の側面が大きいんですね。だから、経済と平和、そして環境っていうのがSDGsは常に大きくて、これを考えなければいけないっていうところもSDGsの前のMDGsと違うところとしてある。あとは、これは持続性とも関連しますが、今の時代の流れとして、常にデジタル・テクノロジーを使って、デジタルを常に取り組みに入れろっていうのが、国連事務総長もそうですけど、UNDPの総裁とかは常に話していますね。



藤井

ありがとうございます。では次が最後のターンということで、榊原さん、そのあとにアティラさんご質問してください。

榊原

私からもSDGsに関してお二方にご質問させていただきたいのですが、一般的な考え方として支援というのは、途上国や資源の足りない国に対して行うというイメージがあります。ですが、日本であれば例えばジェンダー問題だと思うのですが、ジェンダーなどに関しては、先進国に対しても支援や変化が必要な問題だと思っています。それで、その国に自分から変える力はあるのに文化的に変えられない部分とかがあると思うのですが、そのようなことに対して国連という立場からすると、どのような働きかけをするのか、ということが気になったので教えてください。

アティラ

私からは再びキャリアについての質問になるのですが、お二方の学生時代についてお伺いさせていただきたく、学生時代から現在のキャリアに繋がるまで、ご自身で行っていたことで最もやってよかったということがあれば教えてください。私自身のことに関しましては、将来のキャリア形成はある程度考えてはい

るのですが、そのために例えばインターンなどをいくつか応募しようと思っているのですが、行きたいインターンというのは受からないことも多く、なかなか思い通りのキャリアに進めるかどうか不安というところがあります。そこで、これだけはやっというてよかった、ということがあればお伺いしたいです。

藤井

田邊さんいかがですか。

田邊氏

はい。まずは、榊原さんのSDGsに関して、どうやって、もともとあった文化を変えるのかっていうところですが、これも一長一短、一朝一夕、すぐにどうこうできるっていうところ結構難しいのではないかと思います。というのも、例えばタジキスタンであれば、それこそジェンダーで、女性はプロテクトされるものだっていう伝統や文化があるので、男性もプロテクトしたいし、女性もプロテクトされたいっていうところで、もうそれがマインドセットとして根付いている。南スーダンとかでも、女性が水を運ぶものだっていうところは、文化として根付いてしまっていて、そういうものを男女平等だからっていう一言でひっくり返す力はないですね。ただ、そういうところの啓発活動で、例えばテクノロジーで、南スーダンであれば頭の上ののっけて水を運ぶのですが、ローラーでもっと手軽に運んで、テクノロジーの力で慣習へのアプローチを変えたりとか。後はさっきの質問の回答にも重なるのですが、“End Violence against Woman” っていう活動をやっていて、タジキスタンで言えば、女性に対する暴力はどうしても目に見えない形で起きているので、見えないところを声を上げながらアドボカシーとして色々なところに発信していく。発信していくことによって、男性がプロテ

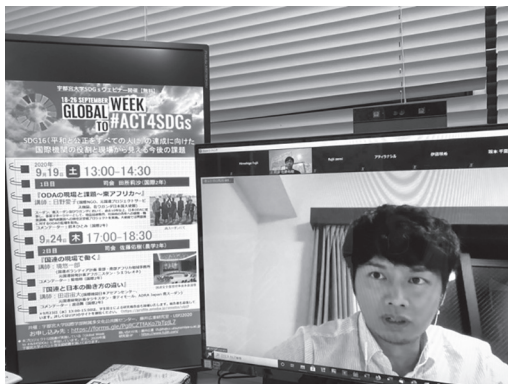
クトするもの、女性がプロテクトされるものという元々の伝統とかマインドを、少しずつそれを揺れ動かしていく活動。すぐにできるというよりも、積み重ねていく活動に取り組んでいると思います。やっぱり、人の行動変容っていうのはなかなかすぐには変わらないので、積み重ねが大事です。例えばコロナで言うと、手洗いもそうですが、南スーダンでは手を洗うという習慣すらないので、日本人では当たり前なのですが、その当たり前を積み重ねていくことがやっぱり大事で、国連はこういった地道な啓蒙活動も行っています。というのが榊原さんに対する質問の回答です。

アティラさんの質問で、学生時代にやっていた方がいいということに関しては、私は典型的に何もあまり行動しない学生だったので、アティラさんみたいにインターンするとか、なかなかキャリアが思うようにいかないっていうのは、考えたことすらなかったので、考えている時点ですごいですね。逆にこれは藤井さんと境さんに聞いてみたいっていうところで、私個人として最近感じているのは、できる限り具体的に落とし込んでいこうっていうのは考えていて、例えばこの前、境さんに次のポストのために筆記試験の相談をして、筆記試験でこういう回答がいいんじゃないかっていうサジェスチョンをもらったんですよ。その中から、その筆記試験のこの回答がいいなっていう部分を

ピックアップしてそれを毎日読んで、カッコいいと思ったフレーズは今度何かのきっかけで使おうっていうのを思っていて、そういう風に意識しながら最近は生活しています、というのが回答です。なので、藤井さん、境さん、学生時代にやっておいた方がいいこと、私も知りたいので教えてください。

境氏

まず、ジェンダーについてですが、日本も結構先進国で遅れていますよね。だから、田邊さんが言ったみたいに急には変わらないかもしれないですね。でもやっぱり徐々に地道に啓発活動とかやっていくのと、ある程度はジェネレーションが変わらないと変わらない部分も残念ながらあるかもしれません、でもそう言っていると変わらないので。あとは一気に景気とか変わるといい。女性参加なんてすごい何年も前から言っていますが、それはもちろん女性が参加しなきゃいけないっていうのはもちろんなんですけど、経済的な魅力からも主張されていますよね。労働人口が日本は減っているのも、実際女性も働いてもらわないと経済が回らなくなる。理由は何にしろ、色んな理由を使ってエンジェルポイントというか、どんどん広げて取り組んでいくしかないのかなと思います。日本もそうですけど、アフガニスタンとかすごく大変だと思うんですよ。タジギスタンとかもそうかもしれませんが、農村部とかに行くと男女平等の話すらできないんですよ。ジェンダーの話から入ると、君たちとは話ししないよって、そういう地域もある。20世紀前半から、近代国家化の一環として、結構女性を社会に進出させようって動きがあったみたいなんです。でもそのときにすごい反発があって、全然上手くいかなくて。それから不安定化に繋がったって例もあるので。だから今回の和平交渉で噴出してくる課題もすごく難しい問題。でも重要な問題だ



と思いますが、答えはないですね。でも、これまでの経験から思うのは、何らかの形で女性や部族をはじめとした和平に関わるべきすべてのグループが参加している和平でないと、その和平は長続きしないと思いますね。あと正義の問題ですね。藤井さんが詳しいですけど、そういう正義っていうのをおろそかにすると、それも平穩のために正義をちょっと後回しに、数年後っていうふうにやっていると、それも持続性のある和平は難しいのかなって思います。

あと、キャリアですね。学生の時にやっていたのは、まさしく私も学生の時はキャリア系のことはあんまりやってなくて、サッカーばかりやっていたんで。あんまり偉そうなことはいえないかな。結構自分はマイペースでのんびりしているので、性格が。でも時間って一瞬なんですよ。今42歳ですけど、もうついこの間まで大学にいた感覚です。ほんとに時間ってすぐ過ぎちゃうので、もう少しそれを意識して、まあ根がのんびりなんですけど、もう少し色々時間は有限ってことを意識して取り組めばよかったと思います。例えば行動することってすごく大事だと思います、行動しないと分からないこともあるので。自分も結構考え過ぎちゃう傾向がありますが、どんどんどんどん行動して行って、やっぱり自分が国連で働くにしても、どこでどういう風に働くかっていうのは色んなやり方があると思うので。最終的にはその人に合うところで働くのが一番いいと思います。どういう問題に一番パッションがあって、それにどういう風に関わっていきたいのかっていうのを突き詰めて考えていくことが大事です。でもそれを考えているだけでは分からないので、行動もしてみる。後は、自分をオープンにして、さっきの田邊さんの話じゃないですけど、いろんなことを先にやっている人はいるので、そういう方々の話を聞いて、行動していくっていうことでしょうか。そういうことを、もし今の自分が学生だったら積極的に取り組んでみたんだと思います。

藤井

お二人ともありがとうございました。最近色々な実務家の方と会って話をしていると、学部生の時にそんなにインターンしたり、海外に行ったり、という方は少ない印象です。田邊さんも境さんも、私も含めて、大学院に行ったらキャリアを真剣に考えて、学部生の時とは180度違うような学生生活を過ごした感じが、学部生の時って海外でボランティアとかインターンとか、私の場合は資金的な理由が大きかったのですが、まったくしていませんでした。ただ、私自身がそうでしたが、大学院修了後に経験した国連でのインターンは、職員の方とのつながりを作ることができるので、上司からの評価も気にして一生懸命取り組んでいました。その後、別の部署から声をかけて頂けて、短期ですが雇用して頂いたので、とても嬉しかったのを覚えています。何が言いたいのかと言えば、インターンに行った時点で、多少の成果を残せるくらいの知識がないと、次につながることも少ないので、学部生のときにそんなに無理してキャリア形成だけを考えなくても良いのではないかと思います。むしろ、国際協力の分野で働こうと思ったら修士号は組織の規模にもよりますが、基本的には必須だと思いますので、勝負は大学院進学後からかと。昨年の座談会で野口大使がおっしゃっていたように、国際協力というのはアクティビティの性質であって、その国際協力をするために、あなたはどの分野のエキスパートとしてそのチームに入るのですか、ということがとても大事になってきます(藤井2020b:15)。大学院に行ったら、もっと専門性も増えるし色々自分の意見も主張できるようになる。ですので、学部生の時は、大学院でしっかり知識を吸収できるだけの土台を作っておくのも大事かと思います。

田邊氏

私も、よく考えたらこういう国際協力的な仕事をしたいっていう原体験って就職活動っていうのが結構あって、就活の時にはじめてJICA（国際協力機構）の存在を知って、学部生時代の時に何もしてないけど、就職試験で受けたんですね。でも何も勉強してないから、普通に筆記で落ちて。そのときの悔しさとか、なんか切なさが原体験になっているところはある。まあそういう、あえて頑張っ受かろうとしなくても駄目だったところがモチベーションになって、後々繋がっていくのかなって気がしています。あと、さっき境さんが言っていた文化のところでジェネレーションが違うって言うのは、まさにその通りだなと思って。コペルニクスの地動説は、はじめ誰も信じなかった。でも何で信じられるようになったのかって、信じなかった人がみんな死んでいって、信じた若い世代が増えたから。ジェネレーションの新陳代謝ってかなり大きな要因ですね。ということは、今まさに榊原さんとアティラさん達の若い世代が、世論って言っちゃあれですけど、自分の意見を発信していくって、ひょっとしたら私たちが思っている以上にめちゃくちゃ大事なんじゃないかなっていうのは思います。

藤井

境さん、田邊さん、今日は貴重な機会を頂きましてありがとうございました。学生の皆さんもお疲れ様でした。

参考資料

藤井広重（2020a）「持続可能な開発目標（SDGs）の地域社会における実践と課題－SDG16（平和と公正）をめぐる国際規範と地域性についての試論－」『宇都宮大学国際学部研究論集』第50号、109－120頁。

——（2020b）「平和と公正な社会（SDG16）の実現を目指してー野口元郎国際司法協力担当大使と宇都宮大学国際学部生による座談会ー」『宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター年報』12号、14-22頁。

Global Week to #Act 4 SDGs, A Turning Point for People and Planet（<https://act4sdgs.org/>, 2020年12月1日アクセス）。

UN Women, In Focus: 16 Days of Activism against Gender-based Violence（<https://www.unwomen.org/en/news/in-focus/end-violence-against-women>, 2020年12月1日アクセス）。